

胃の拡大内視鏡診断

八木一芳, 味岡洋一 著

胃の拡大内視鏡所見から組織像を想起可能とする教科書の登場

佐藤病院消化器内科

小澤俊文

10年ほど前になるだろうか、成書にて胃の拡大内視鏡写真を見た。白色光にて捉えられた画像は胃炎粘膜のきれいな画像ではあったが、それ以上琴線に触れることなく時間が過ぎた。

それから消化器内視鏡は飛躍的に光学的進歩を遂げ、NBI併用拡大観察がハイビジョンで可能となった。70年代の故吉井隆博先生による実体顕微鏡観察や楠信廣先生による胃の拡大観察粘膜分類(ABCD分類)はあったものの、*Helicobacter pylori* (*H. pylori*)の発見前の時代であり、観察機種の問題もあり普及には至らなかった。90年代後半に細径の拡大内視鏡が開発されてからは各地の学会、研究会で胃の拡大観察に関する話題が取り上げられるようになったが、主に癌が対象となったのは胃癌大国の日本では当然の流れといえる。

そんな折、近隣で八木一芳先生の講演会があり40km離れた街に車を走らせ参加した。膨大かつきれいなスライドと拡大観察の動画に魅せられたのは確かだったが、何よりも内視鏡画像と病理組織との対比の繰り返し、そこから所見を構成する要素、すなわち病理組織構築像を「想定」する理論に驚倒した。会終了後に、八木先生から新潟での拡大内視鏡勉強会開催を伺い、すぐに参加を決めた。そこから拡大内視鏡観察の奥深さに魅せられることになった。

2010年10月に上梓された『胃の拡大内視鏡診断』は、前述した研究会に途中から参加させていただいた者として真に鶴首していた教科書である。きれいな内視鏡写真がふんだんに使用されており、ほぼ同じ数の組織像との対比は八木診断理論の真骨頂が貫かれている。

全ページの約1/3が胃の正常粘膜と慢性胃炎という“異常粘膜”の解説に費やされる様は壮観であり、初学者の理解を深めるにはうってつけの書である。拡大観察で見られる血管と構造とをそれぞれ分析、分類する方法論は諸家と通ずるものであるが、氏は恒常性の高い“構造”に重きをおいてWZ(white zone)なる“光学的用語”を用いる。豆知識にはWZが観察される氏なりの想定理論が記されているが、本書を読了後に膝をたたく想いをするのは小生だけではない。胃癌診断にはWZと異常血管の組み合わせからなるフローチャートが用いられる。2つの高分化型腺癌のパターン(mesh血管+不鮮明WZ, loop血管+顆粒・乳頭状WZ)を基本とし、それに合致しない所見(irregular mesh pattern, wavy micro vessels, ghost-like disappearance of WZなど)では他の組織像を考慮するとしている。胃癌の多様性に対処する優れたstrategyであり、理解するには多少の時間を要するものの、WZの可視性と組織の成り立ちを理解できれば自らの切除

標本を顕微鏡で覗く衝動に駆り立てられる。最後に新潟での研究会コアメンバーによる20症例が呈示されているが、ここまで読み進めた読者は会参加の疑似体験ができるはずだ。“何を観ているのか”が理解できたときの喜びを、本書を通じてぜひとも感じていただきたい。またいくつかのコラムには、用語誕生の秘話などが書かれており興味は尽きない。

八木先生は、胃炎があまり注目されていない時代から静謐にも愚直なまでに拡大内視鏡を用いて病態を追求してきた。時には心ないやゆもあっただろう。*Helicobacter*診療が当たり前となった現在、その先見性は正しく、胃炎とは“非癌という正常粘膜”ではなく「炎症細胞浸潤を来した異常な粘膜」であることを改めて認識すべきである。八木先生の想いは辛酸入佳境に違いない。

大腸や食道領域における拡大観察の有用性の後塵を拝しつつも、胃には胃炎という炎症(異常)の場が存在することが多いため、癌の範囲診断や深達度診断など興味も尽きないし、また課題も多い。新潟における八木先生を中心とした臨床と病理とのタッグがこの問題の答えに近づくことを期待し、気は早いながらも充実した内容の第二版を心待ちにしている。

●B5 頁148 2010年 定価10,500円
(本体10,000円+税5%)

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)